

特定非営利活動法人
和歌山 e かんぱにい



ニュースレター VOL. 4
(2013. 12)

—contents—

1. 2013 年度 総会報告
Iパワー・インクルヅ 研修会開催中！
2. 総会記念講演
「ふりかえってみる女の暮らし」
- 3・4 特集「自分らしく生きる」
真道ゴーさんインタビュー
- 5・6 eか・んコラム
『eかんぱにい おすすめ♡ブック♡』
『知っ得！なっ得！ジェンダー用語』

編集後記

2013年度 総会開催

7月10日(水) りいぶる会議室C

昨年度の事業報告と今年度の事業計画案、予算案、県男女共同参画センターの一部事業受託などについて説明。“りいぶる”での公開講座では、男性や中高年など普段“りいぶる”に馴染みのない参加者が多く、センターの周知や男女共同参画の啓発に効果がみられたとのこと。また、図書・交流スペースの利用拡充を目的に「保育つき読書の時間」「“りいぶる”絵本の広場」「“りいぶる”シアター」を開催し、初めて来館する若い母親や親子の参加も増え、図書室等の利用にもつながり、気軽に寄れる“サードプレイス”として活用されつつあると報告がありました。

今年度の事業について、男女共同参画の啓発を次世代につなげていくにはさらなる活動を行う必要性があるため、エンパワー・エンカレッジ研修会として連続講座を開催する人材育成事業の実施が提案されました。

続いて、理事の宮崎恭子さんから「ふりかえってみる女の暮らし」と題し、記念講演を行っていただきました。

カラダとココロの「女子力」UP! 講座 開催中!

第4回 12月20日(金) 10:00~15:00

「女性として知っておいてほしいこと」

講師：市場 恵子さん(心理カウンセラー、大学非常勤講師)

会場：和歌山市男女共生推進センター“みらい”

(和歌山市小人町29 あいあいセンター内)

リプロダクティブ・ヘルス/ライツの視点から4回連続で開催してきた講座。最終回は女性として自分らしい生き方をするために知っておいてほしいことを学びます。

ランチタイムをはさみ、午後からは講師もまじえての女子会! 参加募集中ですので、皆さまどうぞご参加ください。

お申し込みは、ecompany821@gmail.com まで。

※eかんぱにいのHPにもアップしています。

ふりかえってみる女の暮らし

講師 宮崎 恭子さん

(高齢社会をよくする女性の会和歌山代表)

近世(1603年徳川幕府ができてから江戸時代の終わりまで、約300年間)と、近代(1868年明治維新から第二次世界大戦終了まで)のなかでの女性の置かれていた立場や、生きざまについてお話していただきました。

近世は身分制度の枠のなかで生きることを強いられ、この時代の女性の地位は史上最悪といわれていると述べ、すべての基礎は「家」であり、その代表である「家長」は男でなくてはならないと決められていた。女性にとって「家」とは嫁いで後継ぎを産むことであり、「舅・姑に仕えて夫に従え」など自由のない立場だったそうです。当時は幕府公認の遊郭「吉原」が繁盛、女の子たちが「年貢が払えない」「親の飲み代の代償」などの理由で売られ、政府公認の売買春が行われていました。売られた女性たちの境遇は想像以上に悲惨だったのではないかと述べられました。

近代に入り、1872年(明治5年)に「学制」が発表され中学校に女子の入学が認められ、男女平等教育を行っていたと紹介、教育の中身も共通だったそうです。しかし1879年7月法改正、中学校の男女共学禁止、小学校もクラスを男女に分けることに。そして日清、日露戦争と時代は戦争中心へ。良妻賢母を求められた女性たちは戦争応援団となっていきます。第1次大戦後、市川房枝らが婦人参政権獲得の運動も行うが、第2次世界大戦への流れのなか道は閉ざされ、敗戦後アメリカの指示で参政権が与えられたと解説されました。

これまで、女性たちがいかに男性中心の時代の流れに翻弄されながら生きてきたかということがわかり、現在もまだまだ男性優位が残っていること、次世代へ向けて私たちがあきらめず活動を続けていくことが必要であると改めて学んだ講演でした。





特集 自分らしく生きる

第5代 WBC 女子世界フライ級チャンピオン

真道ゴーさんにインタビュー!

今年5月、和歌山初の女子世界フライ級チャンピオンとなったプロボクサー、真道ゴーさん。自ら女性として生まれ、男性の心を持つ「性同一性障害」と公表し、ボクサーとして頂点を目指しながらスポーツを通して、子どもたちや生きづらさを抱える人たちに勇気や希望を与えたいと活動されています。

“自分はいったい何者なのか”

子どもの頃からスカートが嫌いで男の子とばかり遊んでいたという真道さん。周囲との違いをはっきり感じたのは中学生の頃、“女性”として生きる違和感を誰にも言えないまま、バスケットに打ち込む学生時代を過ごします。大学時代は周囲に理解されずいじめを受け、自分が何者なのか、この先生きていて幸せなのかと葛藤し死を考えるほど苦しみました。「性同一性障害」だと知った時、初めて「ああ、自分はそうだったんだ」とストーンと心に落ちたような気持ちだったと言います。

20歳で「きっと親には分かってもらえないだろう」と思いながら、親と決別する覚悟で打ち明けた時、母親がもうすでに気づいていたことを知ります。母が「今まであなたにそうではないかと話そうと思いながら、向き合えなかったことを許してほしい。あなたが笑顔でいてくれることが幸せ。この先他の人より大変なことがあるかもしれないけど、大変なことは人を不幸にはしない、土台になる。やりがいのあるものを見つけて生きて」と言ってくれたことで、前を向けたと話されました。

ボクシングとの出会いー自分らしく生きる道ー

自分が性同一性障害だと知り、母の理解も得て前向きに生きようと、子どもの頃の夢であったレスキュー隊員をめざします。手始めに体を鍛え直すためボクシングジムに通いました。ボクシングと出会い、「自分が見失っていたものがここにはある」と一瞬で引きこまれ、プロボクシングの道に。家族の応援、ともに歩むパートナーとの出会いもあり、やりがいを感じる一方で、心の性と「女子」という枠組みで闘う現実とのほざまで葛藤し引退も考えるようになったそうです。

そんな時、「あなたの目は輝いている。どうすれば生きやすいのか、笑顔でいられるのか、大事なものはそこ、今の居場所を大事に」と、性同一性障害と診断を受けた医師からの言葉に大切なことに気づかされます。そして、パートナーの「あなただから好きになった。男とか女とか、一番性別にこだわってるのはゴーさん」との言葉に吹っ切れ、“自分にしかできない人生”を歩もうと決意しました。

そして今年5月、地元和歌山で試合が開催された WBC 女子世界王座に挑戦、男女通じて和歌山県初の世界チャンピオンとなりました。

人生は挑戦—あきらめないで踏み出して—

今年8月、和歌山市園部にスポーツジム「G-SPORTS」をオープン。発達障害児や運動が苦手な子、高齢者など幅広い人たちにスポーツに親しんでもらえるように取り組んでいます。「子どもたちが少しでも自信を持てるように、手探りですが自分だからできることがあるのではないかと思います」と話す真道さん。スポーツを通じ、子どもたちに夢を与えられる存在でありたいと努力を続けています。「性同一性障害であると公表してからたくさんの人の悩みを聞く機会が増えました。悩みや苦しみは、一人で抱えこまないで誰かに話してみしてほしい。失うものがあるかもしれないけれど、わかってくれる人は必ずいる、あきらめないで」と一歩踏み出すエールをいただきました。

「人生は挑戦！」と爽やかな笑顔で話す真道さん。「女性から男性へ戸籍を変えて生きるには、性ホルモンの投与や子宮卵巣などの生殖器を摘出するなど条件があるが、更年期障害を伴うなど体の負担も大きい。どんな選択をしても『女性として生まれたこと』とずっとつきあっていく。パートナーとも様々な選択肢があり、どう生きていくか話し合いながら考えていきたい」と話し、真摯に“自分らしい人生”に向き合う真道さんの前には、ますます輝く道が続いていくと思います。
真道さん、ありがとうございました！

初防衛戦は、12月22日（日）和歌山ビッグウェーブ です!!



Info... ★G-SPORTS ★

住 所：和歌山市園部 637-1

ロイヤルハイツ吉田

電話番号 073-499-7905

営業時間 10：00～21：00

※一般開放は 13：00～16：00、18：00～21：00

定休日 木・日曜、祝日、お盆、年末年始

ホームページ [G-SPORTS オフィシャル WEB サイト](#)

eか・ん コラム

eかんばんにいいおすすめ♡ブック♡

“りいぶる” 図書室の蔵書から、スタッフ選りすぐりの2冊です。
ぜひ図書室へお立ち寄りください (*^_^*)

ダブルハピネス



著 者：杉山 文野
出版社：講談社新書

常に“女体の着ぐるみ”を着ている感覚で生きてきたと話す著者は、性同一性障害をかかえ心と体のギャップに毎日死にたいと思っていたという。「もって生まれた違いが障害なのか、それとも違いを受け入れられない社会に障害があるのか？」を問い続ける日々。

男でも女でもない自分と向き合い、カミングアウトし、長い苦悩の道のりの先に手術を選んだ著者。読めば、性同一性障害について理解を深めることができ、そうすることで差別を生まない社会となることを確信できる。

女って大変

働くことと生きることの
ワークライフバランス考



著 者：澁谷 智子
出版社：医学書院

この本では、10人の女性たちの「大変な物語」が展開する。女性が働くとき、男性のそれとは違う結婚、家事、育児、介護等での“女役割”の過剰責任行動が、女性たちを追い詰める。それに比べ、男性が働き続けることは「なんと容易いことなんだろう」と思わずにはいられない。

10人の女性たちは、自らの力で、また他者の力を借りて大変さを乗り越えてゆく。その大変さが女性たちを強く成長させる。うんうんと相槌を打ち、元気をもらえる1冊だ。で、「過剰責任行動って何？」というあなた、次ページの「知っ得！なっ得！ジェンダー用語」をご覧ください。

知っ得！なっ得！ジェンダー用語

ジェンダー用語って、毎日を生きる上で得はあっても損はないものばかりです♪ 今回はこの2つの言葉です。



— セクシュアリティ —

ズバリ！「性的なこと」です。人の性は様々な要素が影響しあって、実に多様な性のかたちがあります。その要素とは、同性愛（レズビアン：L、ゲイ：G）、両性愛（バイセクシュアル：B）、異性愛（ヘテロセクシュアル）など自分の性の対象を指す「性的指向」と、自分が男性、または女性だという自己認識をさす「性自認」があり、生まれ持った性別と心の性別が違うために苦痛を感じる状態を性同一性障害（トランスジェンダー：T）といいます。その頭文字のLGBTという言葉聞いたことがある人もいるのでは…？

生物学的にも性器は男・女だけでなく両方の特徴を持つインターセックスという状態もあり、社会的につくられた女らしさ・男らしさの影響も含めると、性のかたちは一人ひとり違って当たり前であり、どの状態も特別なことではないのです。

— 過剰責任行動 —

聞き慣れない言葉ですよ。女性たちが自分の責任ではないことまで過剰に引き受けて、自らが苦しんでしまう状態のことをいいます。例えば、「子どもが学校に遅刻する」のは母親である自分の責任だと思い、子どもが遅刻しないように必死に先回りしてしまうことや（遅刻せずに行くかどうかは子ども自身が考えることです）、DVの被害者の女性が、「夫が暴力をふるうのは自分が悪いから」と、何とか暴力をふるわないように努力する（暴力をふるうのは加害者の問題です）などです。

日本は男性中心の社会であり、「男性（夫）のため、子どものため」に女性が尽くすのが当然という意識が女性にも男性にも刷り込まれてきました。その影響で、特に恋愛や家族など親密な関係において女性が無意識に過剰責任行動に陥りやすいといえるかもしれません。

「相手のため」ばかりでなく「自分のため」にも生きること。少し自分の生き方を見直して、背負い過ぎているもの（責任）があればサッサと下ろしちゃいましょう(^^)ゞ

編集後記



今年台風が猛威をふるった年でした。年々、異常気象が起こっている気がします。自然からのメッセージかもしれません。

“りいぶる”の一部事業受託もはや4年目に突入しました。一歩一歩ですが、センターの存在も知られるようになってきたのでは、と思いたいです。近い将来、「“りいぶる”といえば男女共同参画の拠点でしょ」と言ってもらえるように、これからも身近な存在となるべく活動していきます (*^_^*)

あなたも会員になりませんか？

和歌山eかんぱにいは、平成21年5月に認証された特定非営利活動法人です。一人ひとりが持てる力を十分発揮できる男女共同参画社会の実現をめざしてさまざまな活動を展開し、ふるさと和歌山を元気にすることを目的としています。

お問合せ・お申込みは下記まで

—あなたらしく生きる、キーワードは3つのe—

特定非営利活動法人 **和歌山eかんぱにい**

〒640-8323 和歌山市太田 2-4-24

TEL/FAX 073-471-5557

E-MAIL ecompany821@gmail.com

URL <http://wakayamaecompany.web.fc2.com/>

